

太宰治『吉野山』論

——期待はずれの連鎖——

*館 下 徹 志
Tetsushi TATESHITA

A study of Dazai Osamu's "Yoshino Yama"

はじめに

歌枕として名高い大和の吉野山に「物好の発心」を遂げたひとりの男が暮らしていた。井原西鶴『万の文反古』(元禄九・一六九六年一月刊)巻五・四「桜よし野山難義の冬」¹は、その男が知人にしたためた書簡と作者による短い批評とからなる浮世草子である。太宰治はこの西鶴作品を『吉野山』、『新釈諸国噺』昭和20・1、(生活社)という短編小説に編み直した。

アジア・太平洋戦争の末期に書かれ刊行された小説集『新釈諸国噺』には、前非を深く悔いる者の姿が繰り返し描かれている。宗旨の違いを理由に結婚を許されなかった男女が駆け落ちをし、貧しい暮らしの中、一子を授かるが、飼っていた猿の過失によってその愛児を喪う。儲け話に誘われて家を留守にしていなければ防げた悲劇であった『猿塚』。ある武士が同僚の子息を伴っての旅の途中その子を事故で死なせてしまう。咎は若殿と本人にあったのだが、その代償として自死を促すほかなかったのは、やはり同行していた実のひとり息子だった『義理』。父親譲りの非道ぶりを発揮していた追いはぎを業とする姉妹が、強奪した反物の所有権をめぐる互いに殺意を抱く。だが、その直後に火葬の現場を目撃して無常を観じた二人は、自らの悪心を告白し、深く詫び合う『女賊』。いずれの悲話にも、当事者やその周囲の人々がその後出家するという発心譚の枠組みが与えられていた。誰かを喪ったり殺めたりしたことへの悔恨の念が仏道に入る契機となるのである。とすれば、これらの諸編は命の儚さを後景とする結縁の物語でもあった。

『新釈諸国噺』に収められた十二編の掉尾を飾る『吉野山』は、「無用の発心」から僧形の身となった「眼夢」がその決断そのものを悔い、寂しさ極まって「更にまた出家遁世したくなつて」しまうという、自らが招いた憂き目に焦

点を当てた作品である。「発心」後を描くこの小説の内実は、前述した三編がたどり着いた結末の意義を変容させ、あわせて「諸国噺」という枠組みにも影を落とすことになるだろう。

先行研究を概観すると、『新釈諸国噺』の他の作品と同様に、典拠調査から比較研究、主題論、語りの構造分析へという移りゆきが確かめられる。まず、山田晃、田中伸、寺西朋子の論考²によって、「桜よし野山難義の冬」のほか『万の文反古』巻二・三「京にも思ふやうなる事なし」、巻四・三「人のしらぬ祖母の埋み金」の一部も典拠であることが判明した。津島美知子が回想したとおり、「題材も西鶴本のあちこちからとり、実朝や西行の歌を入れているかと思えば、でたらめ歌を入れ」、「自由奔放に太宰流を発揮している」作品であることは疑いようがない。

そのような錯綜する典拠群と『吉野山』本文との比較研究は、田中伸、佐藤義雄が道を開いた。田中伸は、「桜よし野山難義の冬」に見られる「男色の狙いをもつ内容のほとんどを切り捨てた」創作態度に注目し、太宰は西鶴から「人間の裏面のコメディ」³を継承したとする。また、「色欲の世界」に代わる「醒めた生活者の視点」の導入を指摘した佐藤義雄は、典拠から逸脱する叙述を洗い出し、「パロディーに任せて思うままに冗舌を揮う」ことに「太宰の意図」⁴があったと論じた。一方、杉本好伸はそれまでの研究史を批判し、『万の文反古』の特質といえる「評文」を『吉野山』では省いたことで「作者の直接的な言葉」の表出が避けられ、典拠との差異からそこに読者が「作者の存在」そのものを消しがたくかんじてしまう⁵。仕掛けがあると述べる。これらの研究を基盤として、後に取り上げる木村小夜、斎藤理生らの精緻な作品論が書き継がれ、小編とはいえ『吉野山』は太宰の創作方法を探るうえで見逃せない小説で

* 釧路高専創造工学科一般教育部門(国語)

あることが明らかになりつつある。本稿は、その『吉野山』を同時代の諸文脈の中で捉えなおし、再評価しようとする試みである。

一

『吉野山』はその〈笑い〉に焦点を当て論じられることが多い小説である。主人公の言動に「哀れな滑稽」を見る田中伸は、「これこそ西鶴の町人物に見られる人間喜劇の世界であつた」と評価する。また、斎藤理生は「西鶴作品の物語の筋や設定だけではなく、滑稽な語りの構造を積極的に生かしている」点に注目する。ここではそれらの論考をふまえながら、眼夢と里人とのやりとりを表れた〈笑い〉の質について、外在する文化的な脈絡も参看しつつ掘り下げてみたい。

吉野山の麓に住む里人たちが僧形の眼夢のもとを訪ねるのは、もれなく金目当てであつた。衣食住の支えとなる物品の多くを、眼夢は里人から言い値で買い取らねばならない。「本当に、この山の下の人々は、たちが悪くて」と嘆いてみても、「この品が無ければ餓死するより他は無い」からには、取引の主導権が里人側にあることは明らかだった。「山を降りて他の里人にたのんでも同じくらゐの値段を言ひ出すのはわかり切つてゐます」という眼夢の推測はおそらく正しい。里人たちは山中に住む者を共有の上得意とすることで、最大の利益を持続的に得ることができるからである。したがって、この状況において僧形であることは潜在的な被虐性の徴でもあつた。翻つて、里人にしても、山居の人々それぞれの性情や支払い能力を見誤ることは許されない。彼らの欲求の傾向と懷具合を分析し、表面上は真つ当な商取引を続ける必要があつた。そこに駆け引きの必要が生じ、その妙味やおかしさも生成する。

この犬の毛皮は、この山の下に住む里人から熊の皮だとだまされて、馬鹿高い値段で買はされたのですが、尻尾がへんに長くてその辺に白い毛もまじつてゐますので、これは、白と黒のぶちの犬の皮ではないか、と後で里人に申しますと、その白いところは熊の月の輪といふ部分で、熊に抛つては月の輪がお尻のほうについてゐる、との返事で、あまりの事に私も何とも言葉が出ませんでした。

また先日は、すりばちをさかさにして持つて来て、これは富士山の置き物で、御出家の床の間にふさはしい、安くします、と言ひ、あまりに人をなめた仕打ち故、私はくやし涙にむせかへりました。

里人の狡智は、相手の足下を見て、取れるところからは取るという生活者のたくましさを表象する。商取引の、あるいは「御出家」への氣遣いという装いの中で、法外な売りつけ行為をできるだけ継続することがその狡智の目的であつた。表向きには「御出家」などと持ち上げていても、眼夢の生殺与奪を握る里人にはそのような関係をいかにして維持するかという計算以外、眼中になかろう。「熊に抛つては月の輪がお尻のほうについてゐる」という見え透いた言い訳も、「御出家の床の間にふさはしい、安くします」という厚かましい媚びも、眼夢になれば通用するという成算があればこそ発せられる。実は「犬の皮」・「すりばち」であることが明白であつても〈買い取る／買い取らせる〉という、眼夢と里人との非対称的な関係が厳然としてあるかぎり、ここまで理不尽な商取引でも成立してしまう。里人の遣り口の汚さを問題にしたとたんに、眼夢には多くの生活必需品が手に入らなくなるといふ事態が訪れることを、両者ともに理解しているのである。それゆえ、眼夢にとってはこの実態を直写する〈詐欺〉や〈強請〉^{ゆすり}という言葉は禁句であつた。「あまりの事」、「あまりに人をなめた仕打ち」とくやしがるのが関の山なのだ。

眼夢は自ら選んだ吉野山での通世の結果として、率直な物言いを自制し、里人に買わされる物資を頼りに生きるほかない現実を不承不承受け容れている。眼夢の執着を見抜いている里人たちは、そこにつけ込むための工夫をこらす。ここに、不遇をかこつ者への共感が入り交じる、哀感を伴つた笑いが生まれる。いわば、悔し涙のユーモアである。

里人が持つて来る米、味噌の値段の高い事、高いと言へば、むつと怒つたやうな顔をして、すぐに品物を持帰るやうな素振りを見せて、お出家様が御不自由してゐらつしやるかと思つて一日ひまをつぶしてこんな山の中に重いものを運んで来るだ、いやなら仕方が無い、とひとりごとのやうに言ひ、

眼夢は里人の親切心を装う押し売りに抗うことができない。「いやなら仕方

が無い」という「ひとりごと」はこうした場の決めぜりふであつただろう。笑劇の基礎となる非対称的な人間関係の中で、里人による実効支配の事実が隠蔽される。必然的に、本来は尊敬表現であるはずの「お出家様」の「御不自由」は軽侮を表す皮肉に転じるほかない。社会通念としての僧侶への敬意を逆手に取る、したたかな言語運用である。堂に入っていたであろう帰り支度の「素振り」とともに、このやりとりには笑いをもたらす演劇的要素がちりばめられている。そこに主調音として響きつづけるのが、眼夢の抱く不遇感であつた。『吉野山』は〈当てが外れた〉男のひとり語りによる喜劇だったのである。

二

そもそも、眼夢の不遇感の始点には、「諸行無常を觀じて世を捨てた人には、金銭など不要のものと思ひ」、「山には木の実、草の実が一ぱいあつて、それを氣ままにとつて食べてのんきに暮すのが山居の樂しみと心得てゐ」たという眼夢の先入觀があつた。出家遁世をめぐる仏教説話の定型が眼夢の抱いていた〈夢〉のよすがだつたのだろう。名利を厭い、修行に専念した玄寶や僧賀（増賀）をはじめとする高僧たちの逸話は、「及び難くとも、こひねがふ縁とし」（鴨長明『癡心集』序）で、僧俗を問わず広く知られていた。「諸行無常を觀じ出家遁世するのは、上品な事で、昔の偉い人はたいていこれをやつてゐるのです」という眼夢の訴えかけは、素朴な言い回しながら、そのような逸話をふまえた虚勢といえよう。

例えば、『閑居友』（承久四・一二二二年頃成立）を著したとされる慶政の場合はいさうであつた。「松尾の奥」に入山する際用意していた七日分の食料が尽き、慶政が「芋の茎の干たる」を煮ていたところ、「薪取る山人見あひて、其日の食は供養して」くれた。その後も「山人」の布施で「芋の茎」を食さなくてもすむようになり、ついにはそこに寺（法華山寺）が建立されたという（無住『沙石集』）。仮に「山人」の厚情が何らかの功德を期待するものであつたとしても、名利に背を向ける出家者への崇敬の念が喜捨という行動を促したにちがいない。この典型的な果報譚の前提になるのは、信仰を媒介とした僧と俗との交流である。無住は、「真実に仏道に身を入れて如説に修行せん人、衣食の二事欠くべからず」と、遁世の心構えさえ正しければ「衣食」の心配は無用だと説く。『吉野山』の眼夢が心に描いていたのは、このような〈閑居〉の幻想

だつたのだろう。「墨染の衣」を身にまとうことで、誰からも高貴な存在として重んじられるようになる。そのような特異性が仮象にすぎないことは、「ことしの秋に私がうつかり松茸を二、三本取つて、山の番人からもう少いで殴り殺されるやうなひどい目に遭」つたときに悟らねばならなかつた。杉本好伸が的確に評した「一向に目覚めぬ男」は自分に都合のよい幻想にいつまでも寄りすぎるのである。

この山里の人は、何かと欲が深く、この下の溪流には鮎がうようよあて、私は出家の身ながら、なまぐさを時たま食べないと骨ばなれして五体がだるくてたまらなくなりますので、とつて食はうと思ひ、さまざま工夫してみました、が、鮎もやはり生類、不器用な私にはとても捕獲出来ず、そのやうな私のむだな努力の姿を里人に見つけられ、里人は私のなまぐさ坊主たる事を看破致し、それにつけ込んで、にやにや笑ひながら鮎の串焼など持つて来て、おどろくほど高いお金を請求いたします。

『沙石集』に登場する「山人」は、慶政の食へのこだわりのなさ、つまり、命を保つということ以外に食べることに執着から脱した姿に心打たれたのだろう。「芋の茎の干たる」ものとは〈解脱〉の象徴なのだつた。それにひきかえ、眼夢が記す「鮎」の顛末は〈煩惱〉にまみれた毎日を諧謔的に暴露する結果となっている。「この山里の人」がとりたてて欲深だとはいえない。彼らは「なまぐさ坊主」の欲望を満たす商売の機会を探っているまでのことだ。「何かと欲が深い」眼夢がいればこそ、「にやにや笑ひながら鮎の串焼など持つて来て、おどろくほど高いお金を請求」できる。かかる暗黙の相互依存があればこそ眼夢の〈遁世〉は続けられる。ここにも、高僧たちの遁世説話を反転させた笑劇が展開されている。出家者が里人との〈煩惱〉を媒介にした駆け引きに巻き込まれるという設定は、典拠である「桜よし野山難義の冬」には見られない。『吉野山』に繰り返し描かれる、權威を持ち得ない聖職者のおかしさは、太宰独自の構想から生まれた。

「私は、もうこの里人から、すっかり馬鹿にされて、どしどしお金を捲き上げられ」とぼやくばかりで「私のなまぐさ坊主たる事」には無頓着な眼夢は、〈私は騙された〉という被害者意識に強く囚われている。書中「あなた様たち」

または「皆さま」と呼ぶ、茶屋通いに明け暮れていた頃の遊び仲間や「どこへ行くにも私のお供」をし、「若旦那が死ねばおらも死にますなどと言つてゐた」という「駕籠かきの九郎助」からは全く音信がない。「店の金をごまかし血の出るやうな無理算段して」茶屋の「お勘定はいつも私が払」つていたこと、「裏の絹もずぬぶん上等」な「縞の羽織」を貸してやった九郎助に「あれほどたくさん酒手」、すなわち心付けを渡していたことなどがしきりに思い出される。

九郎助に限らず、以前あんなに私を気前がいいの、正直だの、たのもしいだのと褒めてゐた遊び仲間たちも、どうした事でせう、私が出家したら、ぱつたり何もお便りを下さらず、もう私が何もあの人たちのお役に立たない身の上になつたから、それでくると背を向けたといふわけなのでせうか、それにしても、あまり露骨でむごいぢやありませんか。こんなに皆から爪はじきされるとは心外です。私はいつたいどんな悪い事をしたのでせう。

〈金の切れ目が縁の切れ目〉を地で行く知人たちの豹変ぶりに対して、眼夢は恨み言を連ねる。他人の薄情をなじることに気が取られ、執着からの超脱を目指すはずの出家という己の立場も忘れられている。知己からの便りを待つこと自体、人間関係への執着の表れだからである。実は、自らの交友関係が〈金離れ〉のよさによって成立していたということを眼夢は直視できない。「遊び仲間」が「露骨でむごい」のではない。金で結びつく以外にないそうした間柄を形作ってきた責任は、ほかならぬ眼夢自身にある。『破産』や『粹人』にも描かれていた遊里における金・欲望・言葉をめぐる応酬は、これらへのこだわりの全てが〈遊び〉の阻害となることを刻みつけていた。「お勘定はいつも私が払」つていたことにふれてしまった時点で、「遊び仲間たち」にとつて眼夢こと俗名「九平太」は〈無縁〉の者となるのである。

「駕籠かきの九郎助」は、音韻の近似から〈雲助〉を連想させる名を与えられている。〈雲助〉とは「駅路ニ漂泊シテ、到ル所、継立ノ人夫トナルヲ生活トスル賤シキ者ヲ呼ブ卑語」(『言海』)であつた。宿駅の駕籠かきや渡し場の人足を務め、時に旅人の弱みにつけ込み、法外な支払いを要求したり伝法な振る舞いに及んだりすることもあつたとされる。九平太に取り入つていた「駕籠かきの九郎助」は、〈雲助〉の無法を体現するかのようになり、「若旦那」の出家後

は手の裏を返し、つれない態度を取ることが暗示されていたのだろう。

また、「九郎助」といえばその名のとおり、江戸・新吉原に鎮座していた(九郎助稲荷)の略称でもある。「九郎助は稲荷仲間の色男」、「大社九郎助洒落て叱られる」、「化かせ化かせと九郎助の御信託」などと川柳にも詠まれ、主に縁結びの祈りを聞き入れてくれる神社として、新吉原では廓内四隅にあつた稲荷の中で最も厚い信仰を集めていたという。九平太が眼夢となる「出家遁世の動機」は、茶屋で「つひに一度も、もてた事はなく」、それがもとで「女を力まかせに殴り、諸行無常を観じ」たことだった。したがつてそこには、「どこへ行くにも私のお供」をしていた、〈縁結び〉をかなえてくれるはずの九郎助がいようと、「私だけでもてず」じまいに終わるといふ苦いアイロニーが浮かび上がる。

三

古来、「吉野山」という空間はどのように表象されてきたのだろうか。「隠れ家はよし野と見定め」(「桜よし野山難義の冬」)と眼夢が述べた、隠遁の地としての「吉野山」の位置づけは、既に『古今和歌集』(延喜五・九〇五年)所載の歌にその祖型を見ることができるといえる。

みよしのの山の白雪ふみわけて 入にし人のをとづれもせぬ(壬生忠岑)
み吉野の山のあなたに宿も哉世のうき時のかくれがにせむ(よみ人しらず)
世にふれば憂きこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ(同前)

きっかけは様々ながら、現世の煩わしさから距離を置きたいと願う人々にとつて、大和の仙境「吉野山」は憧憬の対象だった。日々の暮らしにつきまとう「憂きこと」を振り払うには「山のあなた」という隔絶された山里は恰好の「かくれが」にほかならない。おそらくそれはまず、「趣味的な隠遁生活の場を求めた文人貴族たち」(小島孝之)が見出した仮想空間としてあつたのだろう。「世のうき時の」と条件が限定されるのは、「吉野山」があくまでも想念上の奥山だからである。もちろん、独りひそかに隠れ住むことが、世俗の煩惱から解放たれるという仏教の基本理念と合致することはいうまでもない。そこには「吉野山」への山岳信仰も重なつてこよう。したがって、真摯に仏の悟りを得よう

とする者からは濁世への「をとづれもせぬ」こと、つまり音信が途絶えるのは当然であり、むしろそうした安らかな脱俗の境地は望ましい在り方として称賛されたにちがいない。

このように「吉野山」を仏教的空間として表象する根拠は、『新古今和歌集』¹⁹（元久二・一二〇五年）において確定した感がある。

世をいとふ吉野の奥のよぶこ鳥ふかき心のほどや知るらん（法印幸清）²⁰

花ならでたゞ柴の戸をさして思こゝろの奥もみよしの山（前大僧正慈円）²¹

これら僧侶たちによる和歌が刻みつけるのは、「吉野山」の山深さが己の仏心の深さと響き合うことの確信であった。ひたすら仏果を求める（深心）（「ふかき心」）や「柴の戸」を鎖して（「さして」）まで修行に専念しようとする覚悟は「吉野山」に捧げる誓言となる。とりわけ、生涯にわたってこの地への深い思い入れを持ち続けた西行の歌には、その後の「吉野山」表象の一典型が示されている。

山人よ吉野の奥のしるべせよ花も尋ねんまた思ひあり（山家集）²²

吉野山奥をもわれぞ知りぬべき花ゆる深く入りならひつゝ（聞書集）

世を憂しと思けるにぞ成ぬべき吉野の奥へ深く入りなば（御裳濯河歌合）²³

久保田淳は、「山人よ」の歌に詠まれた「吉野の奥」を嚆矢として、慈円・藤原家隆・藤原定家ら西行の次の世代がこの言葉を用いるようになったことに着目し、「新古今時代、一種の流行的な歌句だったか」と推定している。「花」の導きに招かれいくたびも「吉野山」の奥まで分け入った西行には、誰よりも深くこの山里に親しんでいるという矜持があるのだろう。そのよりどころとは、自らの脚で奥山を踏みしめ、「吉野山去年の枝折の道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねん」（聞書集・御裳濯河歌合）と詠うことができるその確かな身体性にあった。思い描く、または遠望する場合とは異なる、「吉野山」との生き生きとした同調が西行の歌の特異性を支えている。こうして「吉野山」は「花」に

象徴される魅惑的な自然美に彩られた隠遁の聖地となったのである。

『古今和歌集』から『新古今和歌集』までの〈八代集〉に散見される「吉野山」（「みよしの山」）を詠み込んだ歌には、「花」、「桜」以外にもいくつかの定型的な自然の風物が描かれていた。その代表的な風物として、「白雲」、「（白）雪」が挙げられる。

吉野山消えせぬ雪と見えつるは峰続き咲く桜なりけり（よみ人しらず）²⁵
白雲とみゆるにしろしめ吉野の吉野の山の花ざかりかも（大蔵卿匡房）²⁶

類歌は多く、誤認への気づきが（見立て）の妙を浮かび上がらせる仕掛けとなっている。遠山であるがゆえに、吉野の里からは雪・桜・雲がいずれにも見紛うという捉え方は、吉野山への崇敬の念に根ざした趣向といえよう。自然の変幻を注視することには、不可知な存在への畏れが伴う。

世をのがれてのち百首歌よみ侍けるに、花歌とて
今はわれ吉野の山の花をこそ宿の物とも見るべかりけれ（皇太后宮大夫俊成）²⁷

すでに出家を遂げ、釈阿と称していた藤原俊成が、官職を離れた今ならば吉野の山に入り仏道と季節の風物に浸る暮らしができるはずだと詠むとき、そこには現し身だけは俗世にとどまり続けることへの諦念が表白されていたのだろう。それほどまでに、吉野山での隠遁こそ出家者としての望ましい到達点であるという認識が「新古今時代」には広く浸透していたものと考えられる。

四

さて、以上のような「吉野山」表象の伝統の中に、『吉野山』の眼夢の在りようを据えなおし、その特質について考察してみたい。

立ち上つて吉野山の冬景色を見渡しても、都の人たちが、花と見るまで雪ぞ降りけるだの、春に知られぬ花ぞ咲きけるだの、いい気持ちで歌つてゐるのとは事違ひ、雪はやつぱり雪、ただ寒いばかりで、あの嘘つきの歌人めが、とむらむら腹が立つて来ます。

全編にわたって、眼夢は「吉野山」を徹底的に俗化する。紀貫之や橘諸兄が詠んだ和歌の一部を引用しながらも、それらの叙景に「いい気持ちで歌つてゐる」と身も蓋もない難癖をつけ、あてつけがましく冬の吉野山の耐えがたい寒さを対置させる。「歌人」を「嘘つき」呼ばわりするのは無理筋だが、佐藤義雄が指摘する「醒めた生活者の視点」を持ち込むことで、腹いせに虚構性や観念性という和歌の修辭法の価値を斬り捨てるのである。眼夢の書簡中、古歌をふまえた表現は七箇所及ぶ。和歌のたしなみを顕示したいという欲求と、その雅味と現実との落差を伝え、苦衷を知ってもらいたいという欲求とが眼夢の「そこかしこに齟齬を生み出しながら突き進む語り」(斎藤理生)の亀裂を表象している。それは「吉野山」という歌語の力に依存したすさみであり、わけもなく〈雅〉に当たり散らす〈俗〉のおかしさを生み出すのである。

この方丈の庵も、すぐ近くの栗林の番小屋であつたのを、私が少からぬ家賃で借りて、庵の裏の五坪ばかりの畑だけが、まあ、わづかに私の自由になるくらゐのもので、野菜も買ふとなるとなかなか高いので、大根人参の種を安くゆづつてもらつてこの裏の五坪の畑に播き、まことに興覚めな話で恐縮ですが、出家も尻端折りで肥柄杓を振りまはさなければならぬ事もあり、その收穫は冬に備へて、縁の下に大きい穴を掘つて埋めて置かなければならず、目前に一目千本の樹海を見ながら、薪はやつぱり里人から買はないと、いやな顔をされるし、ここへ来てにはかに浮世の辛酸を嘗め、何のための遁世やら、さつぱりわけがわからなくなりました。

露悪的な現実描写の果てには、執拗なまでの〈煩惱〉の対象化が待っていた。傍線部はいずれも金銭に関わるこたわりを示す表現である。〈遁世〉の換喩ともいえる「方丈の庵」は、家賃・菜園・肥柄杓の話題で生活臭に包まれる。慈円が「柴の戸」と詠んだような簡素にして清閑なたたずまいはどこにもない。歌語とはなり得ぬ「大根人参」は〈俗〉を代表する野菜だが、それをわざわざ「吉野山」で育てなければならぬという設定にこそ太宰のねらいはあつた。〈雅〉の聖地・吉野山の戯画化である。

「出家も尻端折りで肥柄杓を振りまはさなければならぬ」という現実、眼

夢の語りに遁世者の超脱した境地を聞きたい者にとっては確かに「まことに興覚めな話」ではある。しかし、この手紙の受け手には、はたしてそのような〈期待〉はあるのだろうか。茶屋遊びの「お仲間たち」は、眼夢こと九平太の苦境を訴えるための饒舌に、「野暮で物欲しげで理窟つぽい」人となりを思い出し、苦笑するほかならう。これまで「浮世の辛酸を嘗め」たことがなかった九平太にはふさわしい修行だと嘲るかもしれない。眼夢は読み手の〈期待〉を読み違えているのである。〈当てが外れた〉男に向けられるもの悲しい〈笑い〉がそこには漂う。

とにかく名前を思ひ出し次第、知つてゐる人全部に、吉野山の桜花の見事さを書き送り、おしなべて花の盛りになりにつけり山の端毎にかかる白雲、などと古人の歌を誰の歌とも言はず、ちよつと私の歌みたいに無難作らしく書き流し、遊びに来て下さい、と必ず書き添へて、またも古人の歌「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」と思はせぶりに書き結び、日に二通も三通も里人に頼んで都に送り、わがまことの心境は「吉野山やがて出でんと思ふ身を花散る頃はお迎へたのむ」といふやうな馬鹿げたものにて、みづから省みて苦笑の他なく、けれども、かかるせつなき真赤な嘘もまた出家の我慢忍辱と心得、吉野山のどかに住み易げに四方八方へ書き送り、さて、待てども待てども人ひとり訪ねて来るどころか、返事さへ無く、

やみがたい人間関係への執着が眼夢に手紙を書かせる。傍線部に反復される「書」くことへのこたわりは、それ以外に外部とつながる手段がない眼夢の焦りを物語る。しかし、「四方八方」、「知つてゐる人全部」に「書き送」という無節操さの吐露は、寂しさの極限を示す一方で、この手紙の価値をも引き下げかねない危うさを内包していた。これまでの手の内を明かし、読み手の〈あなた〉にだけは「わがまことの心境」を明かすのだ、という言外の訴えを真に受けるかどうかは〈あなた〉次第なのである。読者が意識するはずの「手紙の戦略性」を分析する斎藤理生は「戦略性を意識すると、手紙の叙述には、建前と本音が交錯していることが読めてくるはずだ」と述べる。錯乱とも映るこの「交錯」を「建前と本音」とに腑分けすることで、読み手は「戦略」の意図を推察しようとする。送り手の底意は、受け手の判断によつて変転を遂げる。「建

前と本音」は初めから実体としてあるのではない。その意味で、手紙のやりとりは送り手と受け手との虚々実々の読み合いとならざるを得ないのである。

意のままに他者を操ることができてはじめて、そのために仕掛けた工夫のことを〈手管〉と呼ぶのだろう。「待てども待てども人ひとり訪ねて来るどころか、返事さへ無」いとあつては、眼夢の「戦略」は〈手管〉とはなり得なかったことになる。傍線部の西行歌二首を作者も明かさず、「無造作らしく」、「思はせぶりに」書くところに、未完の「戦略」はあつた。歌枕・吉野山にふさわしい遁世の日々を装い、僧侶として乙に澄ましてみたのである。「ちよつと私の歌みたい」に引用しても、盗用とは気づかれまいだろうという見込みもあつたにちがいない。こうした他の受け手に対する過小評価を示唆することが、この手紙に記された「わがまことの心境」の信憑性を高めることにつながると思えば、未完の「戦略」は〈手管〉になる。

「吉野山やがて出でじと」の歌は、『御裳濯河歌合』で判者の藤原俊成が「こともなくよろし」と絶賛し、『新古今和歌集』（巻一七・雑中・一六一九）にも採られた名歌である。俗世とのひそかな別れの決意が、「花ちりなばと人や待つらん」と帰還を心当てに待つ「人」への想像と対置されている。無論、眼夢が抱える現実との隔たりは大きい。「待つ」人がいないからこそ「返事さへ無」いのである。そこで修行者としての自覚に溢れるこの歌を、『吉野山』の眼夢はパロディー化し「本音」を托したのだった。「吉野山やがて出でんと」と、西行歌の打ち消し表現を〈還俗〉の意志表明に反転させることで、「やがて」の意味は「そのまま」から「すぐに」へと変わる。下の句では「待つ」主体も入れ替わり、本歌の情感は跡形もなく霧消する。「でたらめ歌」のおもしろさは、本歌に近似する語法でどこまで遠く意味を遊離させられるかにかかっている。西行歌は典拠ではなく、「先行テキストを持つ翻案作品の中で、作中人物がさらに別のテキストを取り込んで語るといふ入れ子構造」³¹（木村小夜）となっているが、ここには「別のテキスト」すなわち西行歌を「取り込んで」変質させるという三重の「入れ子構造」が見られるのである。ここでも、歌枕・吉野山の文化的な枠組みは存分に利用されている。

五

日本仏教には古くから〈真俗二諦論〉³²（しんぞくにたいろん）という現実主義的な考え方があつたと

される。「仏教の教えである真諦（仏法）と世俗の法や規範を指す俗諦（王法）とを峻別する思想」³²のことである。真俗の並存を容認するこの伝統はしかし、戦時下にあつては〈皇道〉を仰ぐ〈臣民道〉と同一視された〈俗諦〉の優位を説く論調へと傾いてゆく。その結果、仏教が説く五戒のひとつである〈不殺生戒〉にも例外が設けられることになる。正義の遂行のために、それに背く邪悪な者の〈膺懲〉を是認する〈一殺多生〉という方便が力を持った。他の宗教とともに、仏教界も戦時下の〈絶対善〉なるものを可視化する装置として自己を演出していたのである。こうした〈皇道仏教〉の在り方に異を唱えた仏教者はきわめて稀であつた。³³国策としての〈戦時教学〉の一端を担う〈皇道仏教〉は、護国という大義の下、宗派を問わず〈大東亜共栄圏〉の建設に寄与しようとした。その必然として、布教という形で、植民地支配における精神的な〈教化〉も推し進められる。³⁴その実効性の評価は難しいが、仏教も〈皇軍〉が保有する戦力の一部にはかならなかった。

かかる戦時下の仏教の役割をふまえると、『吉野山』の眼夢が〈戦力〉の対蹠にある〈無力〉をしるしづけられた者であることの特異性がわかる。昭和十九年九月、大日本仏教会は神道教派聯合会や日本キリスト教聯合会など宗教諸団体とともに、〈大日本戦時宗教報国会〉に統合された。³⁵「宗教派教団の協力一致によつて我が国宗教の本義の發揚に努め国策に即応」することが発会の目的であつた。それを「各宗教独自の使命伝統を鮮明ならしめ一段とそれぞれ特色を輝かせつゝただ一筋に『皇国護持』の彼岸を目指す」とこと敷衍した『朝日新聞』は、十三項にのぼる「事業目標」の核心を「醇乎な信仰心を通じて澁刺たる国策の浸透を期す」と要約する。宗教界の戦時協力は最終段階に入っていた。

『吉野山』は〈大日本戦時宗教報国会〉発会の翌月中旬には脱稿されたと推定される。³⁶しかるに、そこに描かれた眼夢には肝腎の「醇乎な信仰心」がないのだ。それどころか、「殊勝らしくお経をあげてみても、このお経といふものも、聞いてゐる人がゐないとさつぱり張合ひの無いもので、すぐ馬鹿らしくなつて、ひとりで嘖き出したりして、やめてしまひます」と告白する眼夢は、ほかならぬ「醇乎な信仰心」を茶化すことで孤愁を前景化するのである。こうして、戦時体制が信仰に期待するところをはぐらかす、角立つ笑いが立ち現れる。戦時下、戦う主体にとっては〈殺生〉の罪深さの自覚自体が逆に罪となる。

戦争遂行の大義を疑うことは許されず、命を奪い、奪われるという日常への反省や悔いは禁じられる。仏法を仰ぐ（発心）という本来は「醇乎な信仰心」も、〈皇道仏教〉の理念に沿って、王法としての戦時体制が命じる敵国・敵兵に対する呪詛への変換を迫られるだろう。仏法（真諦）はその權威だけを利用する王法（俗諦）に従属せざるを得ない。とすれば、『新釈諸国断』における発心に至る作品群『猿塚』・『義理』・『女賊』は、戦時という特異な時代の骨格を透視するように仕掛けられていたことになるのではないか。発心に到達するまでの欲望や義理にまみれた日常生活を振り返ることがすでに、時局から逸脱する対象化だといえよう。そして、そこに『吉野山』が加わり、『新釈諸国断』は閉じられる。

仏教に「国策」への「即応」が求められた時代、「無用の発心」から出家遁世した男の、断ち切れぬどころか昂じる執着心に翻弄される物語がもたらす効果とは何か。それまで様々な発心の姿を描いてきた『新釈諸国断』の最後に置かれたのは、発心の不可能性、「醇乎な信仰心」の欠如だった。ここで、改めて発心のきつかけを典拠との比較で確認しておこう。「桜よし野山難義の冬」では、「愚僧事は一生に妻子持てころし、遊女の野郎のたはぶれに身をなし、世に思ひ残すこともなく、無常を見ての発心」と、妻子に死に別れ、性的放逸に耽った後に無常を観じての出家であることが明かされていた。果てのない愛執に身を焦がした者が、もはや「世に思ひ残すこともなく」という境地に至ったというわけである。かたや『吉野山』には、「あなた様たちのお仲間にいれてもらつて」の茶屋遊びで、毎回「私だけでもず」仕舞いという不首尾の連続が導因として語られる。

或る夜やぶれかぶれになつて、女に向ひ、「男は女にふられるくらゐでなくちや駄目なものだ」と言つたら、その女は素直に首肯き、「本当に、そのお心掛けが大事ですわね」と真面目に感心したやうな口調で申しますので、立つ瀬が無く、「無礼者！」と大喝して女を力まかせに殴り、諸行無常を觀じ、出家にならねばならぬと覺悟を極めた次第で、

「遊女の野郎のたはぶれに身をなし」という『万の文反古』の眼夢とは対照的に、繰り返し「女にふられる」という当てはずれの悔しさが『吉野山』の

出家の発端にはあった。逆説として語ったつもりの負け惜しみに、またもや当てはずれの応答が追い打ちを掛ける。『吉野山』の九平太は、連鎖する期待はずれの恨みを一気に晴らすため、その代補として、出家することで社会的承認を得ようとしたのだらう。（遁世）こそ「上品」にして「高貴」な生き方であり、吉野山で出家さえすれば、仏教説話に描かれた高僧たちのように諸人から敬われることを信じていたのである。

ところが、期待はずれの連鎖は終わらない。里人には「すっかり馬鹿にされて、どしどしお金を捲き上げられ」、知人たちからは「返事さへ無」という「浮世の辛酸を嘗め」る。『万の文反古』の眼夢が「随分世は捨て候へども、はなれがたき物は色欲に極まり申候」と「色欲」という煩惱の「はなれがた」さを懺悔していたのに対して、『吉野山』には「世は捨て」たところが見られず、被害者意識に囚われた、人間関係・食・金銭への執着、言い換えれば期待だけが横溢している。典拠から破戒僧たちの乱行や男色の暗示を引き継がなかった『吉野山』は、質・量ともに典拠とは異なる煩惱に眼夢をまみれさせる。

墨染の衣だけでも似合ふかと思ひの他、私は肩幅が広いので弁慶のやうな荒法師の姿で、狼に衣の例に漏れず、何もかも面白くなく、既に出家してゐながら、更にまた出家したくなくて何が何やらわからず、ただもう死ぬるばかり退屈で、

歎きわび世をそむくべき方知らず、吉野の奥も住み憂しと言へり
といふ歌の心、お察しねがひたく、実はこれとて私の作つた歌ではなく、人の物もわが物もこの頃は差別がつかず、出家遁世して以来、ひどく私はすれました。

「狼に衣」とは本来、「姿は僧侶の形であるが、内心は虚偽不実の出家を罵つていう」諺である。ここでも、内面の問題はさておき、外形へのこだわりという煩惱が眼夢を捉えて放さない。木村小夜が論じたように、眼夢には、「ある種のお手本、流通している型とでも呼ばれるべきものに裏切られ、にもかかわらず再びその型に帰って行こうとする傾向がある」。³⁷「墨染の衣」の次は源実朝の憂愁を「お手本」にしようというのである。³⁸しかし、その歌の借用も、「出家遁世して以来、ひどく私はすれました」という自己憐憫の根拠となるほかな

かった。「既に出家してゐながら、更にまた出家したくな」るのは論理的矛盾だが、出家という「流通している型」への依存に縛られていることがわかる。

「頓首」と結ばれるこの書簡には、『万の文反古』であれば「伊丹屋茂兵衛様人々御中」と書かれていた宛名がない。宛名とは、手紙の送り手が受け手として期待する、〈当てにする〉人の名前のことだろう。つまり、『吉野山』には皮肉なことに、初めから〈当て〉にするべき他者が消し去られていたのである。

おわりに

再び「吉野山」にまつわる文化的な背景に目を転じるならば、源義経をめぐる劇的な空間としての記憶を逸するわけにはいかない。(準)軍記物語・『義経記』(十五世紀初頭成立か)に収斂することとなる義経伝説をふまえた謡曲・観阿弥作『吉野静』や世阿弥作『二人静』・『忠信』、近松門左衛門の浄瑠璃『吉野忠信』(元禄十・一六九七年七月以前、大坂竹本座初演)、竹田出雲・三好松洛・並木千柳(宗輔)の合作による浄瑠璃『義経千本桜』(延享四・一七四七年十一月、大坂竹本座初演)などに描かれた「吉野山」では、悲運の英雄・義経を慕う者たちの哀情と苦闘のドラマが展開されていた。例えば、「都に春は来たれども、吉野は未だ冬籠る」と律動的に書き出される『義経記』巻第五で、吉野山中に捨てられた静は尽きせぬ恋情を歌舞に托し、佐藤忠信は知恵を絞り、主君・義経を吉野山から脱出させるために奮戦する。史実はともかく、終焉の地・平泉にたどり着くまで義経主従が繰り広げた数々の逃走劇の中でも、屈指の名場面が繰り広げられた「吉野山」は、様々な芸能で抒情豊かに語り継がれてきたのである。歌枕・吉野山はこうして、〈情〉と〈義〉という近世的規範とも交わることでさらに聖化されたのだった。

「昭和一〇年代の吉野にまつわる言説」を分析した小泉京美の論考に拠れば、「吉野というトポス」は、「勤皇精神を民族的伝統として称揚する「ローマンス」の舞台として機能している」という。吉野朝(南朝)の天皇とその〈忠臣〉たちとが織り成す〈悲劇〉に基づいた「南朝忠臣史観」は、敗戦までの〈皇国史観〉を支えつづけた。『太平記』が、吉野を焼き払った高師直の軍略を「この悪行身に留まらば、師直忽ちに亡びなんと、思はぬ人はなかりけり」と断じたように、戦時下、〈皇国〉を脅かす〈敵国〉の「悪行」は、高師直の〈暴戻〉とのアナロジーで捉えられていたのだろう。悪は亡びてしまうだろう(「亡

びなんぞ」という根拠のない推量だけが、『吉野山』が書かれた頃の敗色漂う戦況を照らす光明だったのではなからうか。〈忠臣〉の物語を必要とした時代に、吉野山は〈皇国〉の理念を表象する特別な空間のひとつとなっていた。

『吉野山』は、この地に集積された〈聖性〉の全てを俗化によって反転させる滑稽小説である。信仰との深い関わりを保ちつつ、歌枕としてその自然美が詠み継がれた〈雅〉の側面も、戦を後景として語られてきた〈情・義・忠〉の規範も、『吉野山』からは排除され、眼夢の執着を映し出す反・劇的挿話の中で、万事〈期待はずれ〉に終わるおかしさだけが連鎖する。手紙の終わり近くで、「それにつけても、お金が欲しく」と述べた眼夢は、実家の「私の寝間、床柱の根もとの節穴に隠して」ある「富籤」の番号を知らせ、「当つてゐるかどうか、調べてみて下さい」と懇願する。読者は、受け手の協力、富籤の当選をともに当てにすることの空しい結末を思い描かざるを得ないだろう。

そうした〈当てがはずれる〉ことの彼方には、〈聖戦〉への期待が空に帰する予感が遠望されるのではないか。昭和十九年七月にサイパン島が、八月にグアム島及びテニアン島が陥落し、戦局は「絶望的抗戦の段階」に移行していた。とすれば、『吉野山』は先触れとして〈戦後〉を透視させる小説でもあったことになる。美しさ、気高さ、潔さといった戦時下に礼賛された〈聖〉なるものの多くが、少なくともひとまず当てにならなくなる時代は、すぐそこまで来ていた。『新釈諸国断』に描かれた十二の〈クニ〉の物語はその意味で、戦争遂行の要件となる〈皇国〉の均質性を相対化する可能性を秘めていたといえるだろう。〈クニ〉を異にする十二の「断」には、戦時体制にはなじまない雑種性が宿っている。とりわけ『吉野山』は、〈俗〉を以て〈聖性〉に半畳を入れ、〈期待はずれ〉というきわどい笑いを創造する小説だったのである。

注

- 1 『万の文反古』の本文は、『西鶴全集』第十(正宗敦夫編纂校訂 昭和3・
- 3 日本古典全集刊行会)による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のままとし、漢字は新字に統一した。文中の傍線は引用者による。

- 2 太宰治『新釈諸国断』の本文は『太宰治全集』7(平成10・10 筑摩書房)による。

- 3 山田晃「西鶴と現代作家治」(『国文学解釈と鑑賞』22・6 昭和32・6)、
田中伸「太宰治と井原西鶴——「吉野山」を中心に」(『国文学解釈と鑑賞』
37・12 昭和47・10)、寺西朋子「太宰治『新釈諸国噺』出典考」(『近代文学
試論』11 昭和48・6)
- 4 津島美知子『回想の太宰治』(昭和53・5 人文書院)
- 5 注3 山田論文
- 6 佐藤義雄「わたくしのさいかく——太宰治「吉野山」覚え書——」(『京都
教育大学紀要A人文・社会』57・2 昭和55・9)
- 7 杉本好伸「(空白)の語り」「吉野山」の作品構造」(『太宰治研究』11 平
成15・6 和泉書院)
- 8 注3 田中論文
- 9 斎藤理生「本音の露呈——『吉野山』論」(『太宰治の小説の〈笑い〉』平
成25・5 双文社出版)
- 10 『沙石集』巻第九・六「證月房の上人の通世の事」(『沙石集』下巻 筑土
鈴寛校訂 昭和18・11 岩波文庫)
- 11 注10に同じ。
- 12 注7に同じ。
- 13 三谷一馬『江戸吉原図聚』(昭和52・2 立風書房)
- 14 本文は『古今和歌集』(小島憲之・新井栄蔵校注「新日本古典文学大系」
5 平成1・2 岩波書店)による。
- 15 『古今和歌集』巻七・冬(三二七)
- 16 『古今和歌集』巻一九・雑下(九五〇)
- 17 『古今和歌集』巻一九・雑下(九五二)
- 18 小島孝之「草庵文学の展開」(『岩波講座 日本文学史 第5巻 一三・一四
世紀の文学』平成7・11 岩波書店)
- 19 本文は『新古今和歌集』(田中裕・赤瀬信吾校注「新日本古典文学大系」
11 平成4・1 岩波書店)による。
- 20 『新古今和歌集』巻一六・雑上(一四七六)
- 21 『新古今和歌集』巻一七・雑中(二六一八)
- 22 以下三首の本文は『西行全歌集』(久保田淳・吉野朋美校注 平成25・12
岩波文庫)による。

- 23 久保田淳『新古今和歌集全注釈 五』(平成24・2 角川学芸出版)
- 24 本文は注22『西行全歌集』による。
- 25 『拾遺和歌集』巻一・春(四二一)。本文は『拾遺和歌集』(小町谷照彦校注
「新日本古典文学大系」7 平成2・1 岩波書店)による。
- 26 『詞花和歌集』巻一・春(二二二)。本文は『金葉和歌集・詞花和歌集』(川
村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注「新日本古典文学大系」9 平成1・9 岩
波書店)による。
- 27 『新古今和歌集』巻一六・雑上(一四七七)
- 28 注6に同じ。
- 29 注9に同じ。
- 30 注9に同じ。
- 31 木村小夜「吉野山」と「遊興戒」——型への〈回帰〉(『太宰治の虚構』
平成27・2 和泉書院)
- 32 新野和暢『皇道仏教と大陸布教 十五年戦争期の宗教と国家』(平成26・2
社会評論社)
- 33 小川原正道『日本の戦争と宗教 1899 - 1945』(平成26・1 講談社選書メ
チエ)、ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア『〈新装版〉禅と戦争 禅仏
教の戦争協力』(エイミー・ルーズ・ツジモト訳 平成27・12 えにし書房)
- 34 大澤広嗣『戦時下の日本仏教と南方地域』(平成27・12 法蔵館)
- 35 「宗教常会」で必勝へ信仰を通じ全国民結束」(『朝日新聞』二二〇二一
号 昭和19・9・23)
- 36 山内祥史『太宰治の年譜』(平成24・12 大修館書店)
- 37 注31に同じ。
- 38 『右大臣実朝』(昭和18・9 錦城出版社)には、この歌(『金槐和歌集』
下・雑部・六八八)を和田朝盛に「お下渡しにな」る実朝が描かれている。
- 39 『義経記』巻第五(島津久基校訂 昭和14・3 岩波文庫)
- 40 小泉京美「空洞化された『吉野山』——太宰治「吉野山」論——」(『東洋
大学大学院紀要 文学研究科国文学』45 平成21・3)
- 41 亀田俊和『南朝の真実 忠臣という幻想』(平成26・6 吉川弘文館)
- 42 『太平記』巻第二十六(兵藤裕己校注『太平記』4 平成27・10 岩波文庫)
- 43 吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』(戦争の日本史23 平成19・8 吉

